
職業選択の自由・女偏

shibito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

職業選択の自由・女偏

【Nコード】

N9308Z

【作者名】

shibito

【あらすじ】

女子高教師の吉村加奈子は、ストリッパーに身を堕とそうとしている教え子の倉科公香を救うべく、ストリップ劇場へと向かった。しかし加奈子は罠に堕ち、公香とともに舞台にあげられてしまうのだった。

いつものように、歓楽街のネオンサインは下品でけばけばしかったし、いつものように、人ごみは歩きづらく、嫌な臭いがして、うっとおしかった。

子供の頃から、吉村加奈子は、夜の歓楽街が嫌いだった。三十一歳の大人になり、女子高の教諭となった今でも、それは変わらなかった。必要がなければ、わざわざ出向いたりはいしない。

すなわち今は、その必要があった。この忌まわしい場所から、教え子を救い出さねばならぬという、それが目的であった。

「レイナちゃん、ちょうど楽屋入りしたところです」

ストリップ小屋に着いてから、案内された事務室で、マネージャーを自称する、園部とかいう若い男が言った。ストリップ小屋、とはいっても、都心の歓楽街に居を構えた、そこそこに大きく、案外モダンで小奇麗な印象のビルだったが、所詮はストリップ小屋だ。いかかわしい、男の性処理を目的とした、唾棄すべき場所。名門女子高校の生徒、それも、学園始まって以来の才媛と呼ばれ、どんな難関大学であっても、並み居る男子生徒を押し退け、首席で入学することが可能だろうといわれている優等生が、働いていていい場所ではなかった。

三年A組の倉科公香が第三種業のアルバイトをしている、という噂を加奈子がきいたのは、ほんの数日前のことだった。

公香の家庭は、父親が外資系企業の実務職をしていて、それなりに裕福だった。生活調査等を鑑みても、家庭環境に問題があるとも思われず、学園での素行も真面目そのもの。そんな、不良行動の片鱗すらも見られない。

これはきくと、学業がずば抜けて優秀である公香を妬んだ何者かの流した、流言飛語の類であろうと、加奈子は判断した。放っておくにしくはない、と。

けれど噂は、その意外性も相まって、放置できないほどに拡大してしまった。加奈子は、とにかく公香と話をしようと考えた。公香を担任として受け持っているのは加奈子だったし、何より、公香の精神状態が心配だったからだ。くだらない噂に心を痛める必要はないと、慰めるつもりだったのだが、そんな加奈子に、公香は言ったのだ。

「いいえ先生。噂は本当です。私、第三種系のアルバイトやってます」

加奈子は園部に案内されて、ストリップ小屋の、狭くて入り組んだ廊下を歩いていた。

「先生は、こういった場所に来られるの、初めてですか？」

先に行く園部が、振り向いて尋ねかけた。グレーのピンストライプ入りの、黒いスーツを着た園部は、若い娘であればころりと騙されそうに見た目は良かったが、裏街道を歩く男にふさわしく、軽薄で胡散臭い空気をまとっていて、加奈子は好きになれなかった。特に、こうして自分を見る時の、どこか馬鹿にしきったような、蔑んで貶めているような眼が嫌だと思った。

「当たり前じゃないですか。性風俗店なんて、私には無縁な場所です」

園部の目線から顔を逸らして、加奈子は答えた。

「興味ない？」

「ありません」

二度目の問いにもきっぱり答える加奈子に背を向け、園部は「こっちです」と言いながら、曲がり角を曲がった。

「やっぱ、教職の第一種さんは、お堅いんですね。今時女のお客さんって、珍しくもないんですけど」

廊下を曲がった先は、小さなエレベーターに突き当たっていた。

園部に促され、加奈子は彼とともに、エレベーターに乗り込んだ。B1Fのボタンが押され、閉ざされた箱の中は、静寂に満たされた。

「他の……他の職種の女性なら、ここへ遊びに来るんですか？ 第二種の主婦とか、他の業種の第三種とか」

加奈子がそう問いかけたのは、疑問を解かれたかったから、というよりむしろ、見ず知らずの男と二人きり、狭い密室に閉じ込められている気詰まりを、紛らわせたい思いからだった。

園部の方は、それを知ってか知らずか、「そうですねえ」と、空とぼけた声音で言ってから、加奈子の方へ、僅かににじり寄った。

「第二種はちと面倒なんですよねえ。ご亭主がごねる場合もありますんでね。たまに、新聞沙汰になったりもするでしょう。第一種なら、問題ないんですけどねえ。実際、ただ客として来るだけじゃなく、バイトして行く猛者もいますよ。第一種の女性は」

「バイトですって？」

加奈子は、驚いて園部の方を向いた。園部の顔が思いのほか間近にあった、さらに驚き、身をしりぞけた。

「まあ、臨時でステージにあがって貰う場合がありますね。一部の方には、趣味と実益を兼ねられるってんで好評なんです。先生だつて」

園部が言いかけたところで、エレベーターの扉が開いた。加奈子は、逃げるようにエレベーターをおりた。

「そこ、真っ直ぐですよ」

背後から、園部の声が呼びかかる。

一階と同じく曲がりくねった廊下を進み、示された鉄扉を抜けると、倉庫か何かのような、ごちゃごちゃとしてほの暗い空間に出た。

そこに、倉科公香は立っていた。短く切りそろえた髪。ほっそりとした白い首。小さな肩。彼女は、濃紺のセーラー服を身に着けていたが、それは学園の制服ではなかった。足元を見れば、昔に流行った白のルーズソックスを履いていた。さしずめ、今夜のステージの舞台衣装、といったところか。

「いらっしやいませ、吉村先生」

公香は加奈子に向かって、ぺこりと頭をさげた。加奈子は、パン

プスの踵を打ち鳴らして公香のもとへ歩いて行くと、セーラー服の袖を掴んだ。

「帰るのよ、倉科さん」

加奈子は、公香を引っ張って歩き出そうとしたが、公香はそれを振り払った。

「帰りません。私、これからステージに立たなきゃいけないんです」

加奈子は、公香の顔をまじまじと見つめた。公香の顔には、舞台用の化粧が施されているようだった。学園に居る時の、端正ではあっても、幼く頼りなげだった印象が払拭されて、ずっと大人びた、派手できつい感じに変わっている。見ず知らずの他人のような、よそよそしい顔つき。加奈子は何か薄ら寒いものを感じて、息を飲んだ。

「倉科さん、いったいどうしちゃったの？ あなたのような優秀な学生が、どうしてこんな、第三種の仕事なんかを」

気を取り直した加奈子は、一番の疑問を公香にぶつけた。

加奈子が教鞭を執る学園において、アルバイトは固く禁じられていた。もとより、第一種女性を生み出すことを第一目標に据えている学園である。生徒は学業に専念することを旨とされていた。男性との交際さえも、結婚、出産、育児という、第二種への道に繋がることされ、理由をつけて禁止されている。ましてや、第三種業で働くなどもってのほかで、学園に知れば即刻退学だ。

ストリップ小屋でアルバイトをしていると加奈子に明かした時、公香はすでに、退学の覚悟を決めていた様子であったが、加奈子は、そのことを学園には報告せず、胸にしまった。

理由は、公香の言葉だけでは、にわかには信じられなかったという。そしていま一つ。公香のような優等生が道を踏み外そうというのを、黙ってみていることはできないという、師としての良心のためだった。

だからこそ今夜、公香が働いているというストリップ小屋に、こうして出向いた訳だった。公香の本心が知りたかった。嘘偽りのな

い、真実の胸のうちを。

公香自身も、打ち明けたい何かを抱えているという確信が、加奈子にはあった。その証拠に、公香は昨日、今夜のステージのチケットを、加奈子に手渡してきたのだ。それは、救いを求めている行動である、加奈子は信じた。

加奈子は言い募った。

「教えて、倉科さん」

「ええ、教えてあげますよ。もちろん」

公香は薄っすら微笑むと、加奈子の手を取った。加奈子よりも十センチばかり背の低い公香は、にこにここと、あたかも、学園でふざけている時のような笑みを浮かべながら、加奈子の両腕を掴んで、腰の後ろに廻させた。

ずっと後ろの壁際にいると思っていた園部が、いつの間にか、加奈子の真後ろに立っていた。

手首に、硬い何かがはめられた。後ろ手に手錠をかけられたのだと気づいたが、時すでに遅かった。園部はさらに、加奈子の顔にも何かを巻きつけた。顔の上半分を覆う、ふさふさとした飾りのついた、アイマスクらしきもののようだった。とはいっても、眼の部分がくり抜かれているから、視界が遮られる訳ではなかった。

「何を」

言いかけたところで、床から怪しげな振動が伝わってきた。

「動くと危ないよ」

園部の声が遠ざかる。加奈子と公香を乗せた床が、丸く切り取られた形でせりあがっているのだ。

程なくして、上昇しきった床は、漆黒の闇の中に止まった。

何かの意思を孕んだような闇の中で身をすくめていると、突然、真っ白な閃光が、周囲の闇を切り裂いた。

わっとあがる歓声とどよめき。眼が眩み、何もわからず眼をつむるしかない加奈子を、怒涛のように飲み込んだ。

光に慣れてきた眼を、怖々と開いた。加奈子がいたのは、電飾や

ライトで飾られたステージだった。

加奈子は声をあげることすら忘れ、呆然と立ち尽くした。ふっと体が軽くなった気がして視線を落とすと、知らぬ間に、円柱の上部を切ったような形の椅子に座らされていて、さらに、その真後ろには長い金属のポールが立っていて、背筋に当たっていた。手錠をかけられた手の内側にポールが立っているのは、ここから抜け出すことはできない。

焦りや怒り、恐怖心、といったものすら諦めざるを得ず、ただ絶望し、顔のない観客の群れに眼をくれるばかりの加奈子の眼の前で、公香が踊り始めた。

ユーロビートの切り刻まれるようなリズムに乗せて、華奢な肢体がくるくると回転し、ステップを踏んで、跳躍した。それは美しい動作だった。はためくセーラー服のカラー。白いパンティーを見え隠れさせながらひるがえる、プリーツスカートの裾。ステージ中央に居る加奈子の周囲を、廻るようにして。加奈子は公香の、予想外な身体能力と表現力を目の当たりにし、場違いな感動すらも覚えた。若々しい躍動感に満ち溢れた踊りのさなか、公香はセーラー服のスカートを外し、前開きのボタンも、もったいをつけながら、上から順繰りに外していった。プリーツスカートのホックを外して床に落とし、光沢のある白いパンティーを場内の客達に見せつけた。床に寝そべり、ぱっと片脚をあげた。低い歓声。半ば開いたセーラー服の胸元から、淡い膨らみがちらちら覗く。突如公香は上半身を起こし、上着を開いて脱ぎ捨てた。

白いTバックのパンティーと、白いルーズソックスと、黒革のローファーだけを身に着けて、公香は踊り続けた。きらびやかなライトを浴びて、滑らかな肌に、汗のしずくがきらきら光った。

そして、いつしか音楽は、気だるいスロージャズに変わっていた。公香の肢体が、悩ましげにくねり出す。小さな乳首を頂点に乗せた、輪郭の曖昧な乳房の膨らみを自ら撫であげ、パンティー越しに、ぷっくりと盛りあがった慎ましやかな膨らみを撫でて、恍惚の表情

を作った。

そうしながら、公香は徐々に、加奈子の足元にすり寄っていた。それにつれてライトも動き、加奈子にも、ピンクのピンスポットが当てられるようになっていた。

公香は加奈子の、膝下タイトスカートから伸びた、地味な肉色ストッキングのふくらはぎを、つうつと指先でたどった。くすぐったい刺激に、加奈子の肌は粟立った。

背筋を伸ばし、加奈子の膝に乳房を乗せた公香は、加奈子を見あげて小さな声で言った。

「先生って、処女でしょ？」

加奈子は何も答えないでいると、公香は立ちあがり、加奈子の肩を撫でながら、分厚いジャケットをその肩から落とした。飾り気のないカッターシャツの上から、軀の線を撫であげた。観客が僅かにどよめいたのを感じ、加奈子は、不思議なめまいを起こしていた。

耳鳴りとともに、肉体から意識が乖離してゆくような錯覚を覚えた。

「倉科さん、やめて」

氣力を振り絞って言葉を発したのは、公香の手が、自分のシャツを脱がせにかかっていることに、気がついたからだった。

「大丈夫です。マスクで顔は隠れてるから。誰も先生が先生だって、気づかない」

公香の腕が大きく動き、加奈子のシャツをくつろげた。ライトの熱気が、素肌を直接照りつけた。脇を締め、肩をすくめるも、そんなことで隠せるはずもない。ベージュのブラジャーに包まれた加奈子の乳房は、今、衆人環視の中に晒された。

加奈子の心は混乱の極みで、今しも気絶しそうなほどだった。全身が汗にまみれ、心臓は割れんばかりに鼓動しているし、酸欠の金魚のように息が苦しかった。口を開け、乳房を大きく上下動させながら喘ぐ加奈子の耳元で、公香は囁いた。

「先生は第一種で……男と対等に仕事ができるけど、その代わり、結婚したり、子供を産んだりすることが禁じられてるわ。子供を作

らなけりや男と付き合うのはいいって建前だけど、でも先生、真面目だから。学生時代の禁則事項を、大人になってもそのまま守って、これまでも、これから……わかるんです。だって先生、私と同じタイプだから」

囁く公香は、驚くほど妖艶に微笑んでいた。笑いながら、加奈子の乳房を撫で廻し、そして、ブラジャーのホックを外してしまった。たわんでよじれたブラジャーは、手錠のかかった腕が邪魔して脱がすことはできない。公香はそれを、どこで用意したものか、ハサミを使って切り落としてしまった。

乳房が完全に露出されると、場内のどよめきは、いっそうの激しさを増した。歓声があがり、口笛を吹く者さえいた。

加奈子の視界が、自我が、くらりと揺れて、瓦解していった。男が、男の眼が、自分の乳房を、全て見ている。そのことで頭はいっぱいで、もはや周囲の喧騒も、音楽も、公香の囁き声も、加奈子の脳髓まで伝わってこなかった。そんな加奈子に、公香は囁き続けた。「私、このまま親や学校に言われるがまま第一種になったら、きっと先生と同じになる。恋愛もセックスもできないで、心身を消耗しながら、ただ仕事だけに追われて……第二種になったって同じこと。男に抱いては貰えるけれど、今度は、家事と育児のみに縛られるの。職業を持って自立することは許されず、世の中から隔絶されて、籠の鳥みたいに夫に飼われ、ただ家のためだけに生かされる。うちの、お母さんみたいに」

公香は、加奈子の耳に囁きながら、露出した乳首をつまんで、こりこりとよじった。他人の手でそんな風にされるのは、生まれて初めてのことだった。僅かな痛みとともに、つままれた場所からは、とてつもなく甘い感覚がほとぼしり出て、下腹部の、一番の深みへと流れ込んでいった。加奈子は、さらに大きく喘いだ。独りでに腰が蠢き、太ももと太ももが、もじもじとこすり合わせる動きをするのを、止めることができなくなっていた。

悪戯をするように、公香の手が、スカート越しに股間をさっと撫

ぜた途端、加奈子は明確なよがり声をあげてしまった。切なく甲高い声だった。こんな声さえも、男達に聞かれているのだと思うと、ますます堪らなくなった。パンティーが、汗とは違うものでぐっしより濡れていることを、自覚した。

「感じてるの？ もっと弄って欲しいの？」

公香は、一転して周囲にも聞こえるような大声で言うと、加奈子のスカートのホックを外し、ファスナーをおろし始めた。加奈子は、いやあ、と首を左右に振ったが、抵抗はしなかった。スカートをずりおろされる時には腰を浮かせたし、パンテーストッキングの上から太ももを撫でられた時も、されるがままになるばかりか、僅かに股を広げ、腰を前に突き出して、パンティーの中で融け崩れたようになっている場所を、ぎこちなく誇示することさえした。

こんな姿さえ、男達は全て見ているのだ。しかも、好奇心と欲望にまみれた、いやらしい視線でだ。堪らなかった。頭がどうにかなりそうだった。加奈子はきつく眼を閉じ、歯を食い縛った。

「そうよ。みんなが先生の恥ずかしい姿を見て、興奮して、勃起してるのよ」

加奈子の心を読んだかのように、公香は言った。

「素敵でしょ。感じちゃうでしょ。こんな感覚、他じゃ味わえない。優秀なごく一部の女しかねない、選ばれたエリートって呼ばれてる第一種でも。男の世話をして、子を産んで育てる、女としてもっとも大切な仕事なんだっておだてられる、第二種でも。だってどっちも同じだもの。結局は家庭とか国家とか、そういったよくわからない概念に、利用される存在でしかないの」

公香は言葉を切ると、加奈子の乳首を両手の指で震わせ、ストッキングの上から、股間の縦筋を、べろりと舐めあげた。加奈子は、またはしたくない声を漏らしてしまった。布越しの、緩い刺激に焦らされて、腰から下が痺れてしまうようだった。

「先生達大人は、第三種業が、もっとも惨めな女の生き方だって言うよね。第一種になれるほど優秀じゃなく、かといって、誰かのお

嫁になって、第二種に納まることもできない女の行き着く場所。男の欲望処理に利用されるだけの、最底辺だって。だけど私、そうは思わない。むしろ、もっとも自由で、自然な生き方に思える。だってこれは、本能だから」

「ほん、のう」

「そうよ。本能」

加奈子のオウム返しに頷いてから、公香は、両手で、加奈子のストッキングを引き裂いた。股の部分から。悲鳴にも似た音を立てながら、左右に開かれたストッキングの裂け目からは、濡れて陰裂に食い込んだ、暗い色の綿パンティーが露わになった。場内の熱気が、露わになった箇所収束するような、異様な感覚。そこが独りでに震え出す。震えには、甘ったるい快感が伴っていた。食い縛る歯の隙間から、うめき声が漏れ出た。乳首が、萌え出る春の木の芽のように、硬く尖って突起していた。

「女が……女としての本能を殺さず、それでいて、誰からの支配も受けずに生きて行きたいと思ったら、第一種にも第二種にもなっちゃ駄目なの。私や……先生みたいな、エッチな変態女なら、なおのこと」

公香は加奈子の、開き気味になった膝の上に、両手をついた。腰を折り、加奈子の顔を、真正面から見据えてくる。観客の方には、Tバックの尻を突き出して見せている形だ。公香の両手が、加奈子の膝から離れた。尻を突き出した格好のまま、己の腰に手を添えて、Tバックのパンティーを、もったいをつけながら、するすると引きずりおろした。

ステージの主役が、肉体を隠す最後のものを取り払ったことにより、観客のボルテージは最高潮にあがった。歓声は怒涛となり、妖しいライトに照らされたステージごと飲み込んだ。リズムカルな拍手とともに、観客は、次の段階を要求していた。自分達に尻を向けて立っている公香が、振り返ることを。前に向き直り、その愛らしい臀部のみならず、性器を――公香の女の源泉である器官を、曝け

出して見せることを。

ほとんど凶暴なまでの、歓声と、拍手と、口笛の嵐の中で、公香は、微動だにせず加奈子の前に立ち尽くしていた。熱に浮かされ、焦点の合わない加奈子の視界には、公香の上気した肌が、瞳を異様にきらめかせ、紅潮しきった美しい顔が、ぼんやりとした夢のように映し出されていた。

「見て、先生」

公香は片方の足をあげ、加奈子の膝頭に、ローファアのつま先を乗せた。両端を奇麗に刈り揃えた恥毛の下から、鮮やかなピンク色をした性器が姿を現した。大陰唇周りの毛は全部剃りあげられていて、割れた部分が丸見えになっていた。肉づきの慎ましやかな、作り物めいて整った小陰唇も、その中身の繊細な粘膜の集まりも。ちんまりとした肉の芽も。そして、それら全ては、性器の中から湧いて出た、彼女自身の白濁した体液によって、おびただしいぬめりを帯び、いやらしい軟体動物のように、自ら蠢き身悶えているようにさえ見えるのだった。

「ねえ先生、私、濡れてるでしょ？ いつもこうなの。ステージに立つと私……露出狂なんです。見られると、興奮するの。裸になって、男達にまんこ見られるんだって想像するだけで、いっちゃいそうになるの。今ももう、いきそうなの。振り向いたら多分、私」

公香は、観客に向かい、臍ごと振り向いた。股間を両手で押さえながら、くたくたと、くずおれるように腰を落とした。床に這いつくばり、白蛇のようにのたうって見せてから、一轉身をひるがえし、股間を突き出すように座り直すと、ぱっと股を広げた。両足を高々とあげて誇示して見せているその様は、孔雀が羽根を広げた姿と、よく似ていた。

熱狂した観客達の、怒号に近い喚き声をききながら、加奈子はまるで、自分の性器が見られているかのような錯覚を起こしていた。頭の中は白く焼け爛れたようで、全ての理性が、全ての感覚が奪われ、消え去っていたが、ただ一箇所だけ。ひたひたにぬかるんで、

重たく張りついたパンティーの中の、煮え立ったように熱い性器だけが、鋭く激しい感覚を保ち続けていた。激しくひくつき、痙攣を繰り返して、断続的な快感を、加奈子の中枢へと送り込んでいた。

それは、オルガスムスの快感だった。性器への直接の刺激は何もないというのに、加奈子は独り、性の絶頂を迎えていたのだった。

「ああー……おまんこ、いくうー……」

その声を出していたのは、加奈子ではなく、公香だった。公香は、上に向かって突きあげた、ルーズソックスの脚をぴくぴくと震わせていた。性器に手を宛がって、そこを、限界まで広げきっているようだったが、あるいは我慢しきれずに、指を使って刺激している可能性もあった。

男達の面前で性器を晒し、絶頂を迎えた公香の後で、加奈子はほとんど無意識のまま、両の太ももを真横に広げようとしていた。

そうしないではいられなかったのだ。公香とは違い、加奈子の性器は、未だ、湿ったパンティーの中にしまい込まれている。加奈子にとって、それは歯痒く、つらい仕打ちであった。

私も。私も。心の中で、加奈子は叫んだ。

おっぱいだけじゃなくて、あそこも……おまんこも。見られたい。私の全てを。私の、本当の姿を。一流名門女子高校にて教鞭を執る教育者で、合格率五パーセントを切る超難関資格であるところの、第一種女性職業選択権利所持者資格試験を、大学在学中に取得するほどの秀才、などという、上っ面だけの私ではない、本当の私……仕事と勉強だけに明け暮れる毎日に疲れ果て、その一方で、肉体の成熟に伴い、日ごと強くなってゆく性の欲求に煩悶し、さりとて、男と同等の労働条件と引き換えに、結婚の資格を剥奪された身であれば、男とセックスのみの関係を築くことも、強固に築かれ固定化された倫理観が許さず、またその勇氣もなく、ひっそりと自慰に耽って肉欲をまぎらわすしかない、哀れなやめ女である私を、男達に見て、知って欲しい。

加奈子が、腰を前に突き出し、大股開きで仰け反った、リンボー

ダンスのダンサーのような格好になったのを見て、客席からは、呆れたような失笑の声が漏れた。

男達から蔑まれている。そう思ったとたん、加奈子の背筋を、電流が駆け抜けた。酒に酔ったような酩酊感と、気味の悪い虫にでも絡みつかれたような悪寒を、同時に引き起こすようそれは、まぎれもない快感だった。

被虐的な、暗い情念の籠った快感だった。

もはや内側からも、軀の自由を奪われてしまった加奈子の傍らで、公香がゆっくりと身を起こしていた。

加奈子の目線からは、逆光になった公香の顔には黒い影が落ちているので、その表情は杳として知れなかったが、何をしようとしているのかはわかった。

公香の手が伸びて、加奈子の真っ白な腹を撫ぜた。

優しい指先がパンティーを掴み、それを、引きちぎるように、下腹部から取り去った。

蒸れた粘膜を、空気が触れて、さっと通り過ぎた。

歓声が、熱気が、男達のよこしまな視線が、その一点に集まっているのを感じた。よじれてたぐまっていた小陰唇が、ぱくりと割れて、ぬめぬめになった中の粘膜が、完全に露出するのを感じた時、加奈子は、さっきよりもずっと大きなオルガスムスの波に飲まれ、甲高い声で絶叫してしまった――。

「お疲れ様でした。いやあ、なかなか迫力に満ちた、いいステージになりましたよ」

スタッフの男に大判のバスタオルをかけられ、脇から抱きかかえられ、引きずるように楽屋にさげられた加奈子を出迎えたのは、園部の薄っぺらい笑顔と、ありきたりな労いの言葉だった。

園部は懷から茶封筒を出すと、加奈子に手渡した。とっさに受け取ってしまった茶封筒を開けてみれば、中には数枚の紙幣が入っている。加奈子は、眉間に皺を寄せた。

「これは、何ですか？」

「今夜のショーの、謝礼金と言いますか。まな板ショーに出たお客が女の場合、差しあげることになっているんです」

つまりこれが、彼の言っていた「第一種女のバイト」ということなのだろうか？ それを加奈子が尋ねると、園部はこともなげに頷いた。

「女の客も、大抵は見るだけですけれどね。まな板に乗りたがる場合も稀にあるんです。まあ、見せたがりなんでしょう。かといって、職にするほどでもないって手合いの第一種。近頃増えてるみたいです。ストレス溜まるんでしょうね。って、先生には改めて言うまでもないか」

加奈子には、まな板ショーの意味はわからなかったが、想像することはできた。客が舞台にあがって、踊り子とともに性器を晒し、性交まがいの行為をすることなのだろう。今夜、自分がしたように。そういうえば、公香に貰ったチケットには、まな板ショーの特別招待券と、確かに書いてあったのだった。

だが、それはそれとして、こんな金は受け取れない。茶封筒を返そうとする加奈子だったが、園部はそれを、やんわりと押し戻した。「遠慮せずに受け取ってくださいよ。ゲームの賞金みたいなもんなんですから。まあ、第二種の女がこんなところで稼いでたら、亭主から訴えられて牢屋行きってことにもなりかねませんけどね。あんたは第一種なんだ。男と同じ権利を持ってる。つまり、男と同じように、性風俗で遊ぶこともできるし、ちよいと小遣い稼ぎしても怒られない。まさに、特権階級ってやつですな」

園部は例の、蔑みきった目線を加奈子にくれた。女を物として、商品としてしか見ていない者の眼だと思ったが、ステージの余韻に揺蕩う加奈子に取って、それはそう嫌なものではなかった。むしろ感じて、性器の穴がひくついた。

昔々、男女雇用機会均等法が施行されてからも、女が男と同等に

働くことは困難だった。

様々な理由が挙げられたが、つまるところ、女はいずれ子を産み、育てなければならぬのだということが、一番のネックになっていた。

ならば、その要因をはなから取り払ってしまえばいい、というのが、女性の役割分業制度の始まりだった。

女を三種類に分別し、それぞれの道が交わらないようにしてしまう。

男と全く同じ条件でもって仕事をし、同じだけの収入を得て、同じ権利を有することが許されてはいるが、その代償として、出産という？リスク？を伴う結婚を禁じられる、第一種。難しい試験をパスした女にだけ与えられる資格で、選べる職業は多岐に渡るし、恋愛活動にも全くの自由が保障されるが、避妊に失敗し、受胎してしまった時点で、第一種資格は剥奪され、場合によっては罰金や懲役刑も科せられる。

旧来の女の生き方そのまま、出産適齢期内に結婚し、子を産んで育てる第二種。実際、資格試験等は存在せず、中学卒業以降の女で結婚した者はもれなく、第二種女性披扶養資格所持者となりうる。パート程度の労働は許されているが、家事と育児に障らない範囲内でなければならず、得られる収入も、男や第一種女性などと、比べるべくもない。一度なったら、一種に転じる道はなく、家庭にて一生を終えねばならない。男との婚姻関係や家事、育児が「職業」とみなされるので、他の男性との不倫等を夫から訴えられれば、「職場放棄」として、罰則を与えられる場合もある。

上記二種類に属さない、通称、第三種女性は、風俗及び性風俗産業従事者の代名詞となっているが、第一種資格がない状態で働く未婚女性も、ここに当てはまる。定職のない未婚女性も同様。ただし、そういった未婚女性が生活の糧を得られる場所は限られている上に、その収入も極端に少ないため、結局は性風俗業に身を堕とすことがほとんどであるゆえに、結局、第三種イコール風俗の女、と断じて

しまっても、あながち間違いであるとは言いきれない。

このような、女の生きる道を完全に分断してしまう制度に対し、未だ反対する向きもあるようだが、それで世の中は、それなりに上手く行っているのだから、当分この制度が変わることはないだろう。それがいいことなのか悪いことなのか、今の加奈子には、よくわからなかった。夜の深くなった歓楽街を歩きながら、加奈子は空を見あげた。都会の夜空に星はなく、ビルを彩るネオンサインの輝きが、忌々しく眼を刺すばかりだった。

ネオンに霞む夜空と同様、加奈子の心も、暗く煙っていた。

倉科公香を連れ帰ることもできなかったばかりか、彼女と同じ、情けない姿を人目に晒してしまった自分。公香の狂った主張を、教育者として、いさめなければならなかったのに。

だがしかし、と、加奈子は考えるのだ。

ステージ上にて公香の展開した理論を、果たして自分は、真っ向から否定せしめることができるのだろうか、と。

第一種になろうが第二種になろうが、それは女に取って、真の幸福には繋がらない。公香の意見は、ある部分で的を射てはいるかもしれないと思った。ステージで踊っていた公香が美しかったことも事実だし、まな板ショーで自分が快樂を得たこともまた、否定のしようがない事実だ。

けれど加奈子には、残る第三種こそが女の生きる道だとは、どうしても考えられないのだった。だってそれでは、女はただのケダモノだということになってしまう。そんなことは信じられないし、信じたくもなかった。

加奈子はため息をついた。どちらにしても、公香に対しては、もう為す術がないと思った。ストリッパーとなった彼女は、学校からも親からも見捨てられるだろう。仕方のないことだ。あれだけ思い詰めて、しかもすでに仕事を始めてしまっているとあらば、今さら第一種にも第二種にも戻れまい。諦めるほかない。

そしてもう一つ。加奈子は園部の言った「今時の第一種」のよう

に、風俗に出かけて性処理をする気こそないものの、多分今後、自慰行為に耽る際には、今夜のことを思い出しながらしてしまうだろうと思っていた。それがとても、情けないことに思われて、憂鬱なのだった。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ご感想、ご批評等ございましたら、お気軽に一言お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308z/>

職業選択の自由・女偏

2011年12月29日01時49分発行